

**特別養護老人ホームに勤務するケアワーカーの
看取り後の省察のプロセスとあり方に関する一考察
—実践経験 5 年以上のケアワーカーへのインタビュー調査から—**

○長崎純心大学大学院 井上 由起 (会員番号・007884)

吉武 久美子 (長崎純心大学・008790)、山田 幸子 (長崎純心大学・001639)

キーワード： ケアワーカー 看取り後 省察

1. 研究目的

近年、「最後まで自分らしく生き、自分らしく死ぬ」ということを実現するために、病院ではなく、住み慣れた高齢者施設での看取りを希望する利用者が増えており、その看取りの質も問われている。高齢者施設において利用者の最も身近でケアをするケアワーカーにとって、看取りは緊張の連続であり、看取り終えたと同時に次の利用者のケアへと向かわなければならない。看取り後は、このような感情疲労を考慮したうえで、その死やそれまでのケアをどのように意味づけるかが問われており、どのような振り返りをするかがその後の看取りの質を左右すると考えられる。

日本福祉大学終末期ケア研究会(2010)は、看取り後の振り返りに関して、4つの条件から構成される終末期ケアマネジメント・ツールを作成し、それを活用し実践のプロセスを評価し振り返ることが看取りの質の向上に一定の効果があるとしている。このように自己のケアの実践プロセスを客観的に評価し振り返ることは重要であるが、それと同時に、利用者と実際の生活を共にするケアワーカーという独自性を考えると、鷺田(1999)や三井(2006)が指摘するように、利用者との個別の関わりを重ねてきた「わたし」という部分での個人の感情面にも目をむけ、それも含めた「省察」が重要ではないだろうか。

社会福祉領域において省察に関する研究は、学生を対象にしたものが多く、ソーシャルワーク教育における省察学習(南 2009; 2008; 2007; 2006)や、介護福祉士養成のための実習後の振り返り(藤原 2014; 小木曾ら 2010; 真鍋ら 2005; 真鍋 2004)等である。一方、実践者を対象とした研究は、堀(2012)の認知症高齢者の介護場面に関するものがある程度で、ケアワーカーの看取り後の「省察」に関する研究は十分ではない。

そこで、本研究では、Atkins, S&Murphy, C(1993)の省察の3段階プロセスモデルを参考に、「ケアワーカーが看取り後に抱える感情への気づきから批判的分析を重ねて新たな視点を獲得するプロセス」を「看取り後の省察」とし、検討することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

データ収集方法は半構造化面接。面接時間は1人1時間程度。対象者は特別養護老人ホームX施設の実践経験5年以上の介護福祉士資格所持のケアワーカー、A、B、Cの3名。

X施設の選定理由は、施設での看取りを行ってきた実績が十分にあり、ターミナルケア委員会を中心に振り返りカンファレンスを実施していること。対象者を5年以上の経験がある者としたのは、複数の看取りを経験し、自身の実践を言語化できると判断したからで

ある。質問内容は主に、①介護実践で体験してきた印象に残っている看取りの事例について、どのような看取りと振り返りをしてきたか、②看取り後、どのような振り返りをしたか、である。結果の分析は、M-GTA（木下，2003）を用いた。

3. 倫理的配慮

面接の際、本研究以外にデータを使用しないこと、守秘義務を遵守することなど伝えた上で、調査の協力を得るとともに、ICレコーダーの録音の許可を得た。

4. 研究結果及び考察 【 】はサブカテゴリー、〈 〉はカテゴリー。

対象のケアワーカーは、利用者の死亡直後に【申し訳なさど無力感】【利用者の死に伴うショック】【感謝と充実感】といった〈看取ったことに対する様々な感情〉を抱いていた。その中で、臨終の際に誰にも看取られない、突然死で看取る側の心の準備ができていないなど、思うような看取りができなかった場合に、【申し訳なさど無力感】【利用者の死に伴うショック】などネガティブな感情が生じる。さらに〈家族の看取りに対する満足度〉が低い場合は、それらが〈ケアの迷い〉につながる。看取り後は利用者本人からのフィードバックを得ることができないため、〈家族の看取りに対する満足度〉がケアワーカーの看取り後の感情や省察を左右しがちであることが推察された。

また、【申し訳なさど無力感】は、自己の行ったケアのマイナス面を焦点化しやすく、その死を引きずりやすいことが推測された。Aは死を乗り越える為、「悩んで、乗り越えて、また悩んで、乗り越えて」というのの繰り返しです。（中略）悪いとこばかりをしてきたわけではないので、（中略）いい部分も見るようにしています。」と述べている。ケアを振り返る際、マイナス面に陥りがちな中で、自己のケアのプラス面を見ることの重要性が示唆された。

【利用者の死に伴うショック】は、利用者と施設での生活を支援するケアワーカーにとって、利用者と密接な関わりを重ねてきた「わたし」という部分での死の受容過程の一つであり、通夜・告別式に参加することは喪の作業と推測される。ケアワーカーは看取り続けることによって、本来、「わたし」という部分では非日常である死が日常化する状況にある。そのような中で、業務的に看取るのではなく「わたし」として人の死を悲しむことを、プロセスの中で意識しようとしていることが伺えた。

対象のケアワーカーの看取り後の省察は、「専門職」としてのケアの客観的な振り返りと、「わたし」としての感情面での偲びの両方を反芻し、そのバランスとあり方を模索するプロセスであることが明らかとなった。省察では、〈看取ったことで起こる様々な感情〉を表出することがカタルシスになる。個別あるいは振り返りカンファレンスなどでその感情を語る場を構築していくことが必要と考えられる。

本研究の対象のケアワーカーは実践経験5年以上であったが、新任の場合には、利用者の死や看取りに、より強い衝撃や悲しみなどの感情を抱き、対処が難しいことが考えられる。今後、新任も含め、どのような省察と支援が必要か検討していくことが課題である。